

テニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』再考

田 中 ま り

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』Gemeinschaft und Gesellschaft は周知のように、十九世紀末ドイツの代表的な社会学者の一人である、フェルディナント・テニエス Ferdinand Toennies の主著である。この論文は1887年に出版されたが、その雛形となる論考は、すでに1881年に就職論文としてキール大学に提出されていたといわれている。テニエスにはこれ以外にも、いくつかの著作があるが、この論文ほどの影響を後世に残してはいないようである。彼自身も刊行後20年以上経って第二版を出す際に、その序文で、この論文の意図と影響に触れ、自らの業績における出発点であることも認めている。

しかしこの論文は、その後それほど高い評価を得てきたとはいえないように思われる。様々な批判が加えられたことについては後述するが、特に問題であったのは、テニエスが提出した「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」の図式が、その論文の全体的な文脈を離れて理解され、使用されたということである。つまり「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という両用語は、かなりインパクトが強かったうえに、様々な社会現象の分析にとって非常に便利であったために、テニエスの意図した方向とは異なる文脈で用いられる結果となったのである。確かにそのような解釈を可能にした責任の一端はテニエス自身の記述にもあると思われるし、分析上有効な概念は広く用いられることが望ましいともいえよう。しかし本稿では『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を再度読み直すことにより、本来の文脈に沿った形でこの用語の意味を考えたい。その際、テニエスのこの論文を十九世紀末という時代の流れの中においた場合に、当時いかなる意義を持っていたのか、また現代の問題に通じるいかなる可能性があるのかについても探りたい。

1 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』再読

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は用語の定義や解説などを含む三つの章、および結論・概略を記した付言という四部から構成されている。第一章では、この論文における様々な概念・用語の定義がなされる。第二章は、前章においてゲマインシャフトとゲゼルシャフトの源泉と指摘した、本質意志と選択意志についての考察がなされ、さらに三章ではこの両概念から生じた法意識が自然法と関連して述べられる。付言では結論としてゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの歴史的な変化が概観されるとともに、国家と共同体の在り方が問われている。

1-1 ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの定義

第一章は「主要概念の一般的規定」Allgemeine Bestimmung der Hauptbegriffe と題して、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、その他この両概念を支える様々な要素を表す用語の定義がなされる。特に冒頭部分においてテニエスは、この論文の主題は人間の意志の肯定的な相互関係であるとし、そこから形成される結合体 *Verbindung* の様々な類型を扱うと述べている。彼によれば、その結合体のうちで実在的有機的生命体とみなされるものがゲマインシャフト *Gemeinschaft* であり、観念的機械的形成物とみなされるものがゲゼルシャフト *Gesellschaft* であると規定される。前者は通常、特に意識されることはないが、所与のものとして生活全般に浸透し、日常的に実感できる実体的な結合であり、より高次の集団の欠くべからざる一部として機能する。後者はそれに対し、意識的かつ理性的に選択される人工的な結合であり、集団の中で一定の役割は果たしているが代替可能である。テニエスは、その集団の理想や意図はいかなるものであれ、自然発生的なゲマインシャフトと人工的なゲゼルシャフトは区分すべきであると主張している。このようなことからテニエスの興味の焦点は、まず結合の類型にあったといえるであろう。

それに続いて、この二つの結合形態の発生要因、それを支える原理についての考察が行われている。例えばゲマインシャフト、ゲゼルシャフトそれぞれの要素が優越的な集団についても具体的に述べられているが、ゲマインシャフトは家族や村落共同体、中世的な小都市の徒弟制度などに結びつけられ、一方ゲゼルシャフトは市民社会や世界交易、工業や商取引と関連づけられている。この部分は結論部とならんでテニエスの歴史的発展についての言及の一部と見られているようである。一般に「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」とであるとされるテニエスの歴史的発展の図式は、彼が中世の小都市や前近代的な村落共同体をゲマインシャフトと見なし、市民社会や商業取引団体をゲゼルシャフトであると見なしていることに発しているといわれているからである。しかしそのために、この部分は、テニエスが理論上の集団と歴史上の集団を混同しているといった批判が集中するところでもある。たしかにゲマインシャフトとゲゼルシャフトを社会類型としてイメージするためには、具体的な集団についての記述が必要であろうが、具体的な記述は同時に多義的な解釈を可能にし、この用語の一人歩きを招いたとも思われる。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念を、社会分析の道具として、マックス・ヴェーバーの定義する「理念型」と同様に社会分析上のモデルとして用いようとした場合には、この部分の解釈によって、もとの文脈とは大きく離れて利用されている可能性も否定できない。したがってこの論文におけるテニエスの意図や立場を理解する上で、特に注意を要する部分であると思われる。そこでここでは特に、様々な解釈を生んでいるこの二つの用語を、テニエス自身はどのように定義しているかに注目した。

ゲマインシャフトの起源は、萌芽形態としては母子関係であり、さらに夫婦関係、兄弟関係など具体的な血縁関係も含まれるとされる。この様々なゲマインシャフト的關係を総合する統一的なモデルとなるのが、「生命の伝達」を目標とする父子関係である。テニエスによれば、この関係はゲマインシャフトの原理をすべて集約しているという。ゲマインシャフトの原理は、能力に応じた労働と享樂の分配である。この場合、労働はあくまでも相互奉仕ではあるが、困難な労働にはより大

きい享楽、自由が分配される。つまりゲメインシャフトの支配関係においては、支配権力は保護を与えるという困難な義務と、服従は安全とセットになっているのである。確かに父子関係は、年齢・経験などにより困難な労働にも耐えうる父親が次世代を担う自分の子供を保護し、子供は父親の権威に服することになっており、ゲメインシャフトの支配関係の原型であるといえよう。もちろんテニエスはこの原理が常に理想的に働くとは限らず、ときとして権力を持つ側の残忍さや服従する側の抑圧を生むことも指摘している。これはテニエスが、ゲメインシャフトを無批判に認めていた訳ではないことを示している。

ところでゲメインシャフト的支配関係のもとでは、困難な義務を果たすために必要とされる経験量や力量を示す指標である、年齢・力・知識または精神が権威となる。これらはゲメインシャフトを維持するための装置としても働くことにもなる。このようなゲメインシャフトの種類としては、血のゲメインシャフトつまり肉親、場所のゲメインシャフトつまり近隣関係、さらに精神のゲメインシャフトつまり朋友（職人仲間など）が設定されている。このゲメインシャフトの心理的基盤となっているものは、相互に共通な結合的な心もち、つまり了解 *Verstaendnis* である。了解は理性的意志と言語に依拠しており、特に共通の語の定義は共同生活の秩序としての自然の法を支えることになる。したがってゲメインシャフトの成立条件としては、成員間の感情的なつながりが深く、コミュニケーションが密であること、成員間に了解が存在すること、成員が共同生活を行っていることがあげられる。そこから、あらゆるゲメインシャフト的集団の原型は「家族」である、という考え方が生じることになる。

ところでゲメインシャフトのタイプは、大きく「家」*Haus* と「共同体」*Gemeinde* という二つのタイプに分けられる。そのなかでも「家」のタイプはさらに、孤立した家（自己完結した遊牧民などの家）、農村の家（自給自足、またはゲメインシャフトの中で補給）、都市の家（交換に頼るため、自らの需要以上のものを作る必要がある）、領主の家（支配と所有によって特殊な位置を占める）といった四つのタイプに分けられる。次に「共同体」のタイプは、村落共同体（土地の統一的使用）と都市（集合的生活形態に起因する共同性、芸術・宗教への結びつき）の二つの型がみとめられる。これらの集団の中には、都市の家のように、生活のために物資の交換を必要とするものも含まれている。後述するようにテニエスは交換・商業活動をゲゼルシャフトの中心的活動としているが、ここでの交換については、商業活動のように営利的なものではないと強調し、あくまでもゲメインシャフト的な規範のもとでの活動であると述べている。しかしここに疑問が残ることは否定できない。たしかにこの部分のテニエスの歴史的な集団についての記述はかなり理念的であり、実際の歴史的集団の実態とは異なるという批判が寄せられることもうなづける。

一方ゲゼルシャフトの原理は、自己以外の個人の領域には踏み込まないという本質的分離を前提とし、客観的価値判断に基づいた価値の同等性の上に関係を築くという。つまり各個人は自身の利益のためにのみ働き、他に利することはない。ただ自身の利益に関連する場合に限って利他的な行為も行われるが、あくまでもそれは損益を計算した上でのこととされる。ここで注目されるのは、この結合関係は所与ではなく、交換という目的のために選択的に形成されるということである。そ

のようなゲゼルシャフトを発生させる要因を、テニエスは「価値の同等性」であるとしている。「価値の同等性」とは、様々な差異があるものを、ゲゼルシャフトに共有される尺度に照らして、客観的な同等性を持つと判断することである。しかもその場合の尺度として、貨幣など、それ自体としては価値のないものが用いられる。このような客観的価値判断は異なるものとの交換を可能とし、そこに取引関係が生じることとなった。このやり方に従えば労働と物品の交換が容易となる。それによって労働力を貨幣と交換する「労働者」が発生し、一方では「尺度としての貨幣」のさらなる発達が進められる。さらに「商品」という概念や、その当然の帰結としての債務概念がおり、所有権の分割も可能となったというのである。つまりゲゼルシャフトの発展は経済における二つの概念の発生に支えられる。すなわち「交換」原理と「貨幣」尺度の浸透である。両者はそれぞれ「市場」の形成と「資本」の発生につながっている。

テニエスは、このようなゲゼルシャフトの社会的基盤を「協約」Konventionと見ている。協約は交換商品としての労働などの「活動」を保証する、活動遂行を強制するための装置である。一方、ゲゼルシャフトの支配原理は価値の所有であるとしている。しかしゲゼルシャフトの基盤となる商業活動は価値の生産ではなく価値の移動を行うのみであるから、より多くを獲得する方が有利であり、そこでより有利な交換を目的として競争が生じることにもなる。その利益は貨幣に還元して貯蔵されるが、貨幣そのものには価値がないため、さらにそれを労働力と交換することによってのみ利用可能である。テニエスはこれをゲゼルシャフトの支配原理の矛盾であるとし、それによって先験的に平等となっているとも述べている。テニエスによれば「労働力」という商品は特殊なものであり、売り手は労働力を貨幣と交換に売ること、他の労働力、労働力の生産物を貨幣で買って消費する。一方買い手の側は貨幣と交換で労働力を買い、その労働力を消費することによって生産された商品を貨幣と交換に売るという連鎖が続くことになる。

テニエスが実際の社会におけるゲゼルシャフトとして想定していたのはいわゆる「市民社会」であるが、ここでは交換が基本原理であるために万人が商人であるとされる。彼らはゲマインシャフトで前提とされたような内的な関係を結ぶこともなく、無限に取引関係を増殖させる。また生産手段を所有すること、つまり工場を発生させることによって工業へ介入し、それによって社会的分業の細分化をもたらすことで雇用者と労働者の分化を促進させるという。テニエスが近代社会に批判的であり、懐古的であるというのはこれらの記述によるものと思われる。たしかにそのような論調も度々見受けられるが、1880年代という時代においてみた場合、工場労働が社会問題化し社会分業が社会発展の一つの動因としてとらえられていた当時であってはむしろ自然な関心であったともいえるであろう。

1-2 ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの源泉

第二章ではゲマインシャフトとゲゼルシャフトの結合形態の源泉となっている要因が、「本質意思と選択意思」Wesenwille und Kuerwilleとして示される。テニエスは会話や記憶、想像や理性さらに文化と商業など、人間の様々な行動・活動を、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトを生み出し、

支えるものとして区分している。というのも彼が社会構造を変動させる直接の要因として想定していたのは、政治的思想や科学上の進歩・経済的な発展ではなく、それらの要素が複合することによって引き起こされると同時にそのような要素の引き金ともなる、個々の人間の日常的な生活感情の変化であったからである。特に第二章の記述からは、テニエスが結合形態における心理的要因を重視していたことがうかがえる。テニエスは習慣や経験さらに情熱や感情といった心理に属する要因を、ゲマインシャフトと関連付けて分類している。また、経験的な意味として性差、芸術と技巧、年齢差、階級差などが考察される。例えば男性や老人はゲゼルシャフト的要素が強く、女性や青年はゲマインシャフト的要素が強いといった対比を用い、その原因についても考察している。全体として第二章は、このような具体的記述を通して両概念の性質を詳しく定義しようとした試みであると思われる。しかしこの部分は、テニエスがこの論文を哲学の領域に属するものと見なしていたことを割り引いても、かなり思弁的である。おそらくゲマインシャフトとゲゼルシャフトに過大な意味付与がなされているという批判はこのあたりから出ているのではないかと推測される。

1-3 ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ

第三章は「自然法の社会学的基礎」*Soziologische Gruende des Naturrechts* であり、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトから発する法意識をそれぞれ分析する。それによればゲマインシャフトは土地に基礎をおく身分権の世界であり、ゲゼルシャフトは貨幣を価値判断の尺度とする債権の世界である。したがってゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行は、個人的な債権関係が家族的結合にとってかわり、個人が家族に代わる社会的な単位となることを示している。テニエスはここで、意識として存在してしまう「自体」*Selbst* がゲマインシャフト的であるのに対して、選択的に組織した自己である「人格」*Person* をゲゼルシャフト的な装置であると指摘している。

結論部ではゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという歴史的発展について、さらに国家を越えた世界というつながりについての考察がなされている。テニエスは歴史的にはゲマインシャフトの時代からゲゼルシャフトの時代へ移行していると主張している。類型区分としてみるならば、ゲマインシャフトは、家内経済に支えられ、一体性を心理的基盤とした本能的連帯による家族生活、農業を生活の手段とし、慣習を共有するという感情的連帯感に支えられた村落生活、宗教を基礎とした道徳的連帯によって秩序づけられ、工芸技術や芸術によって成り立つ小都市生活に結びつく。一方ゲゼルシャフトは、商業に依存し、利益追求のための協約を履行することで成立する会社組織に代表される大都市生活、工業の促進によって発展し、立法・政治についての様々な打算の総括として現れる国民生活、学問・科学の世界における、理性や意識性を基盤とした世論形成による世界主義的生活に結びつくものと定義されている。これらの生活にはそれぞれ、結合された意思の諸形式としての様々な集団が想定されている。その中には実際には存在しない、概念上の集団も含まれてはいるが、現存する集団もゲマインシャフトかゲゼルシャフトのいずれかに区分され、その性格が記述されるのである。ここで特に注目されるのは、テニエスが国家をゲゼルシャフトと見ていることで、これは当時の市民社会論としてはかなり革新的なことであったといわれている。

この点から見てもテニエスの理論が国家の政治的なプロパガンダであったかのようにとらえるのは矛盾であることが分かるであろう。

2 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』再考

冒頭に述べたように、現在の社会学における『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の学問的な評価は必ずしも高いものとはいえないが、この両概念については社会学史上の重要概念として度々言及されている。そこでこの両概念が現在いかなる定義で用いられ、またテニエスの理論についていかなる学問的な位置づけがなされているか、社会学事典などの記載を中心に概観したい。さらにその際、過去における批判点とそれに対する反論に触れ、併せて現代の問題を扱う上で、テニエスの理論のどのような部分が見直されているのかについても指摘したい。

2-1 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の学問的な位置づけ

現在の社会学においては、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、アクチュアルな議論としてよりも、まず歴史的論文として位置づけられている。

現代社会論においては、都市論の先駆的な論文と見なされているようである。特にゲゼルシャフトについての記述において都市社会の問題性を指摘した点で評価されている。テニエスは近代の都市社会をゲゼルシャフトの、それ以前の農村や地方の共同体をゲマインシャフトの典型としているが、個人の「選択意志」と自由、契約的・手段的社会関係の出現を象徴する都市化をゲマインシャフト衰退の原因とし、近代の社会関係の変化を批判的にとらえていると見られている。

一方、市民社会論から見れば『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』は、理論モデルとしての市民社会のなかで、特に国家と市民社会の関係に注目する経済的市民社会論の一つとされる。しかし国家をゲゼルシャフトに含めることで、それ以前の政治的市民社会論がとらえきれなかった、個人と市民社会との関連を視野におさめようとしたという点で評価されている。

文化社会的には、ゲマインシャフトは文化形成の場として注目される。つまりゲマインシャフトの具体的形態は家族生活や村落生活、小都市生活であり、そこでは民族性と文化が形成されるというのである。一方ゲゼルシャフトは大都市生活、近代政治・市場経済を基盤とする国民生活、さらには世論・科学・印刷物によって形成される世界的生活で、これは「文明」の状態であるといえる。しかしこのような位置づけからは、必ずしも高い評価は生まれていない。ゲマインシャフトが育む文化や民族性の問題は、ロマン的歴史主義とドイツの後進性に対する自意識に結びつけられ、ゲゼルシャフトに対する批判は「文明」批判と単純に同一視されている。したがってこの論文の後世のドイツ思想への影響もネガティブにとらえられがちである。

もちろん一番よく知られているのは社会集団論としてであろう。集団類型としてクーリーの第一次集団・第二次集団説などと比較される。ここではテニエスの論文の文脈を離れてゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念を、集団の理念型として用いようとする。したがって両用語の定義が特に重要視され、ゲマインシャフトを親密な本質意志に基づいた感情的・情緒的結合、ゲゼルシャ

フトを契約的な選択意志に基づき、他者を手段化した結合と単純に規定している。先に概観したように、テニエスの図式は過剰に意味付与され過ぎているとの見方もあり、そのような制約をを離れて単純な図式のもとで自由に用いることが生産的であるとする評価もある（見田1988）。それに対しては文脈を離れて用いることについては認めながらも、そのみが有用であるという見解については疑問の声も上がっている（飯田1991）。

社会構造論は、社会学の対象分野についての考察と併せて論じられる。特にテニエスは社会学を概念体系である純粹社会学とその歴史的社會への適用である応用社会学に分け、前者の概念としてゲマインシャフトとゲゼルシャフトのモデルを設定して近代社會の構造的特徴を示したとされている。

社会変動論として注目される点は、テニエスが中世と近代を対比したことである。テニエスは歴史的にゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ移行すると主張し、彼のゲゼルシャフト概念による市民社會像は特に説得力を持つとされる。テニエス自身はゲマインシャフト肯定、ゲゼルシャフト否定の傾向にあると見られており、この姿勢が後の大衆社會論の悲觀主義に引き継がれているとまでいわれている。確かにゲゼルシャフト社會の矛盾と問題点を鋭く指摘するテニエスの論調から考えれば、この論文は社会類型論というより社会変動論として位置づけるのが妥当であるようにも思われる。社会変動論とした場合の批判点はとくに以下の二点であろう。まずテニエスがゲマインシャフト優位を称賛し、ゲゼルシャフトについては悲觀的であったことである。ここからさらに、ゲマインシャフトを「文化」と、ゲゼルシャフトを「文明」と同一視すれば、テニエスが「文明」について非常に悲觀的であったという批判の根拠となっていると思われる。また理論的な面については、歴史的な概念と理念としての概念の混乱が指摘される。確かにテニエスはこの両概念を概念体系としての純粹社会学の枠内で定義したのであるから、そのモデルを歴史的に適應することについてはある程度の慎重さが求められるであろう。しかし一方、歴史的な概念と理論的な概念を整然と分けるのはかなり困難であるようにも思われる。特に近年は社会変動論を、唯一つの要因ですべての文化圏のすべての時代の変動を説明しようとするような、グランドセオリーとして形成するのではなく、複雑な要素の絡まった複合システムとして、さらに歴史的に個々のケースについての研究をとおして見ようとする傾向が強いことからそれがうかがえるであろう（ギデンス1992）。

2-2 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の再評価

さきに述べたように、近年テニエスの再評価がさかんになされている。そこでは従来の一般的評価についての批判もいくつか見られる。例えば「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という用語が、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の文脈を離れて論じられてきた、という問題である。さらに、この著作自体がテニエスの業績全体の文脈から切り離されて論じられてきたことへの反省を促し、この用語を再びテニエスの研究全体の流れにおいてとらえ直そうとする試みもある（飯田1991）。

一方ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの概念には、多くの要素が未分化に複合していたことに目を付け、その要素を細かく区分することで、より精緻な共同体モデルを作ろうとする試みも見ら

れる（見田1979、真木1986）。確かにテニエスの時代には分離できない要素と考えられていたものが、今日では分離し始めている。例えば交通手段や通信技術の進歩は、空間の共有を前提とした地縁という概念を解体し、変貌させつつある。つまりこのことは、これらの諸要素が互いに必然的に結び付いたものではなく、歴史的な条件によって一時的に結合していたことを示すと思われる。このようにみることによって、この二つの概念を社会集団の単なる類型に終わらせるのではなく、社会関係の様々な問題のポイントととらえることもできよう。とくに今日の社会関係について考えるとき、テニエスの功績はまず、近代以前の生活に憧れる近代人の心理を探ることにより、人間の結合形態として、親密さを媒体とする関係の重要性に気付いたことではなかったかと思われる。しかも、ここで見てきたように、その目的は単に過去の生活形態の礼賛ではなく、その中から未来に通用するような要素を抽出することであったと思われる。様々なゲマインシャフトについての記述は、確かにまだ十分に理論的に洗練されてはいないかもしれないが、今後の社会関係についてのヒントとなるような示唆に満ちている。

近年、グローバリゼーションやボーダーレスなどといった概念によってあたかも地球が一元的な世界になるかのような錯覚が生まれている。そのような傾向に対して、グローバルといわれる基準の数々は、結局アングロサクソンの価値観にすぎないという批判も可能であるため、様々な懐疑論から自国文化への回帰が叫ばれるようになってきた。この現象を単純に考えれば、世界や文明という理性でとらえなければならないゲゼルシャフト的なものではなく、自分の感情に親しい、身近なゲマインシャフト的なものに引きつけられる傾向にあるといえよう。一方、家族の崩壊をはじめとする家族集団の変化などの社会問題についても、家族の復権といった用語でゲマインシャフト的なものへの憧憬が語られる。しかしこれらの傾向は、自己中心的な民族主義や家族中心主義、ひいては政治や社会への無関心を生むことにもなる。したがって今後は、自らのアイデンティティの源泉としての故郷や家とその存在の軸をおきながら、理性的あるいは中立的・客観的意識でより広い世界へ向かうベクトルを必要とするという考えもある（トゥアン1997）。親密でありながら支配関係の生じない家族形態、自らの民族的アイデンティティを確保しながらのコスモポリタニズムが模索される現在にあって、テニエスの問題提起は再度評価されるべきであろう。

本稿は Ferdinand Toennies ; *Gemeinschaft und Gesellschaft. Grundbegriffe der reinen Soziologie.* 1979, Darmstadt. および上原訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（東京 1957）に拠った。

参考文献

- 1) ギデンズ・松尾他訳：社会学 第二版 東京 1992
- 2) ギデンズ・松尾他訳：親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム 東京 1995
- 3) 濱島他：社会学小辞典 東京 1977
- 4) Hartfiel / Hillmann : *Woerterbuch der Soziologie.* 1972³ , Stuttgart.

テニエス『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』再考

- 5) 飯田哲也：テンニース研究－現代社会学の源流 東京 1991
- 6) 北川他：現代社会学辞典 東京 1984
- 7) 真木悠介：気流の鳴る音－交響するコミュニケーション 東京 1986
- 8) 見田宗介：現代日本の社会意識 東京 1979
- 9) 見田他：社会学辞典 東京 1988
- 10) パッペンハイム・栗田訳：近代人の疎外 東京 1960
- 11) トゥアン：コスモポリタンの空間－コスモスと炉端 東京 1997